

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 日常語からみた朝鮮文化：叙説（二）   |
| Sub Title        | Korean culture as seen through everyday language (II)   |
| Author           | 野村, 伸一(Nomura, Shinichi)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会  |
| Publication year | 1993  |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.62, (1993. 2) ,p.200(131)- 213(118)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00620001-0213">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00620001-0213</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日常語からみた朝鮮文化—叙説（二）

野村伸一

### 6. 諷刺することば（承前）

1

前回、私は現代韓国の日常語のうちのいくつかを、日本語・日本文化との対照という視点で取り上げ、同時に民衆文化の深みに降りていこうとした（『芸文研究』第60号）。そこでは、民俗世界の具体的な行為に根差した言語、従って時代が激変してもそう容易には変わりそうもないものを主として取り上げたのであるが、その稿の最後に付した「諷刺」のことばは、それらとは少し様相を異にするものであった。それは、日々、生成されるものであり、それだけに時代とのかかわりが密接である。すなわち、その切れ味が冴えわたるときもあるし、逆に生彩を欠くこともある。しかし、全体として諷刺のことばは、ことばで戦うという、朝鮮民族特有のしたたかな言語生活の伝統を十分かいまみさせてくれる。

わが日本では、たとえば、首相絡みのロッキード事件において、ことばは繁茂したが、保守の政治家から「リンリ、リンリと鈴虫の鳴く」と居直られたとき、言語の戦いは終わってしまったかの感がある。心底「リンリでは飯が食えない」と「自省」したのかどうかは知らないが、あれだけ世間を騒がせたにもかかわらず、倫理はもちろんのこと<sup>1)</sup>、言語生活のほうでも、これといって残されたものはなかったに等しい。

ところで、為政者にとっては気の毒なことに、韓国の民衆は少なくともことばの戦いでは執拗にして、かつ、手の内も多彩である。第五共和国の全斗煥政権時代には、大統領夫妻の、そのほしいままの統治スタイルを

「以心伝心」ならぬ「李心全心」ということばで揶揄し、また学生たちは「全斗煥ゲーム」なる花札あそびを即席でこしらえては、役が成立すると、参加者から高い点を取り立てることができるなどとして、そのぶったくりの手法を文字どおり笑い飛ばした。一方、かの時代、9時の時報のテンという音に続いて、テレビのトップニュースには話題がなくても必ず大統領夫妻が登場した。そのためにこのニュースは、「テン全<sup>チョン</sup>ニュース」と呼ばれたし、さらに冒頭のことばが決まって「オヌル（今日）全大統領は…」「トーハン（また）李順子女史は…」といった調子であったため、大統領の号「日海」は「今日」であり、李女史の号は「また」であるといい換えられた<sup>2)</sup>。

このお二人はいろいろ派手に立ち回ったため、今なお、話の種にこと欠かないが、その後を継いだ第6共和国においても、こんな野党議員の声が出されている。

6共（筆者注 盧泰愚）政権は政治は不信<sup>ブルシン</sup>、経済は敗家亡身<sup>ベガマンシン</sup>（筆者注 破産）<sup>クブシン</sup>、外交はへいこら<sup>トワンシン</sup>、治安は底ぬけ<sup>クワイシン</sup>、法案ゴリ押し通過には鬼神<sup>ベジン</sup>であり、国民には背信の「6シン政権」だ…<sup>3)</sup>

これをいったのは鄭大哲というアメリカで政治学を修めた人で、かれは野党では若手のインテリ議員として著名である。ところで、この諷刺のスタイルはわたしにはひじょうに興味深い。というのは、朝鮮朝の「市井雜輩」ともいうべき広<sup>クワンデ</sup>大<sup>デ</sup>らが、仮面戯のなかで両班を愚弄するときによく用いるのが、この語法なのであった。たとえば「鳳山タルチュム」のなかで、下僕マルトギはこんなことをいっている。

両班甲：オイ、マルトギ！

マルトギ：えーっ、この愚か者め！両班<sup>ヤンバン</sup>か、チンコバンか、腰の折れた折半<sup>セツバン</sup>か、狗脚の小盤<sup>ソバン</sup>（膳）か知らぬが、マルトギとか、コルトギとか脚の折れたチンバトギとか、小児が飴屋を見てお祖母さんと呼ぶがように、う

るさくに人を呼んでいるね<sup>4</sup>。(「鳳山タール脚本」)

以上の外にも、たとえば「河回タルチュム」のなかで、下僕チョレンイが学者に向かって「へへへ、おれでも知ってる六経ユツギョソなのに、それも御存じありませんか？ 八万大蔵経テジヤンキョソ、坊主のあほだら経パレギョソ、めくらの眼鏡アンギョソ、薬局キルギョソの桔梗ウオルギョソ、むすめの月経セーギョソ、作男の年経セーギョソ（手間賃）」とって愚弄する場面がある<sup>5</sup>。

上記の諷刺が鄭議員の独創か否かは知るところではないが、この種の韻を踏んだ言語表現は民衆的な基盤を持っているということだけは確かであろう。

## 2

さてまた、大学街テヘタダでは折りに触れ、「模擬国会」と称して時勢に抗う独特な「言語遊戯」が展開される。それはまちがいなく鋭敏な言語感覚の反映である。次のものは1988年10月、オリンピック直後に行われた、ソウル大学政治学科主催の模擬国会の様態である。

10月27日、ソウル大学大講堂で開かれた「第8回冠岳（ソウル大学の所在地）民国模擬国会」には2,500人の学生が集まった。与党は「乙巳日米党」ノクトウ、野党は「甲午緑豆党」という。乙巳は1905年、日本が朝鮮の外交権を奪うための条約を結ばせた年の年号、甲午は、十九世紀末の反外勢、反封建支配の戦い、「東学農民闘争」の起きたときの年号であり、緑豆はその闘争の指導者全瑛準の別名である。

与党代表委員ソナムダン「禪巫堂（へぼな巫女）」は代表演説において「野党は多数の張子の虎に過ぎず、鮮明性などと言い立てているけど、与野党のあいだには、反民衆的独裁の嫡子か庶子かの違いがあるだけ」といい、最後に「統一はなくとも、たらふく食い、ゆたかに暮らしている。過去の政治の非理を整理し、来年もまた取って食おう」とあいさつする。

つづいて演壇に立ったのが、いくぶんびっこを引いた金大三（キム・デサム）野党代表。かれは「キム・デジュン、キム・ヨンサム前大統領候補

を一身に担った、この時代、最後の良心」と自己紹介し、また第五軍共和国（コンファグク＝共和国のもじり）の内幕を攻撃し、「1億ウォンのベンツがソウルには連なっているが、8,155人の昼飯も食えない学童がいる」と指摘する。

つづいて質疑では、まず与党のカン・ウイク（強右翼）議員が登場し、みずから「TK（大邱、慶尚道）師団の右翼決死隊長」といいつつ、「軍人も人間であるから、軍隊の政治参与権を保証し、最低賃金制を導入しろ」といい、右翼の総決起で左翼を根こそぎにしようとさげぶ。

一方、野党のチュ・グンヘ（追窮海）委員は、「延禧宮（注 全斗煥氏の邸宅）の李氏はアメリカの乱視女史をまねて、強心臓財団を作り（注 現実にそのような財団を作らせて私物化した）、国民の心臓をむやみとどきどきさせた」と述べ、さらに「このごろ流行する高位層の職業病は『過去を問うな』という『後天性非理忘却症』だ」といい、また「5共と6共の違いは大統領の髪が多少、長くなった以外にはなにもない」と批判した。

答弁に立ったのが、イ・チョング（李銃口）内務大臣（注 タカ派李<sup>1</sup>春<sup>1</sup>九<sup>1</sup>のもじり）。「政府は、五・五共和国という汚名をそそぐために、町の物価、5,500ウォンのものを6,000ウォンにするなど、すべて切り上げて値上げする方針を検討中」といい、また「左翼シンパを摘出するために『全ての教授をチャブセ（注 学園視察警察要員）に仕立てること』『全学生のブラックチ（注 細胞作りの担い手）化』『白骨団（注 無慈悲な戦闘警察隊）のコマンド化』を推進する予定」と答弁する。

経済分野の質疑もなかなか真に迫っている。サム・ゴンイル（三空一）経済企画院長官は「カネあるところに罪なし」という「有錢無罪（注 有錢者生、無錢者死のもじり）」という原則に従い、あのカネ、このカネごっそりかき集め、「八八コドリ（注 コドリは花札あそびの一つ）シェウルオリンピック（注 サマランチ IOC 会長の発音）を成功させた」と述べ、つづけて「国民の噴出する知性的な要求に応ずるため、『カント（注 ケントのもじり。米国製たばこの輸入が自由化された。）』などの洋モクを輸入したのであり、また新米の買い上げ価格の引き上げを保留したのは、農民た

ちに対する労働者の相対的貧困感が起きるのを憂慮したため」などと強弁し、「傍聴人」からやじられる。

社会分野の質問では、与党のマ・サジ議員が「左がかった容共勢力が浸透したため、冠岳山周辺がこのごろ真っ赤に染まっている」といい、「今後、大学は戦闘警察服務者にだけ入学の権利を与えるか、『昼警夜読』（注 昼は警察、夜は学生の意味で昼耕雨読のもじり）制度を導入しろ」と要求する。

あるいはこんな発言もある。マル・ロマン（口先）文部大臣は、「ただいま、延禧宮で軟禁状態に置かれ、『ああ、いにしえよ』『五月がきたら（注 全氏は1980年5月の戒厳令で完全に実権を握った）』などの歌をうたっている、在野人士ジョン・トゥワン（銭闘王）前大統領の場外闘争に慶賀の気持ちを送る」などといい、さらに「みみずだって、踏み付けられるのたうちまわる。そして死ぬのだ」とからかっている。

他方、コ・チャクファ（固着化）統一院長官は「今後、南北学生会談を積極的に推進し、済州島の学生はソウルに、ソウルの学生は済州島に送りたいとおもう」などといい、「統一論議の窓口一元化（注 政府の主張）がうまくいかないと、『南北韓脱走犯国土巡礼大行進（注 ちょうど脱獄囚がソウルに潜伏していた）』とか『南北脱走犯最高責任者会談』などが提起される恐れがある」と説いた。そして、また注目すべきことに、野党のオ・チュンガン（注 於中間の意味）議員らが、日和見あるいは派閥本位の発言をつづけて、「傍聴者」の批判的的になっていたともいう。

これこそ、現代のすぐれた「演劇」ではなかろうか。あるいは観客が参加して演じる真性のマダン劇の伝統が脈打っているというべきであろうか。同じころ、日本では、昭和天皇の病状報道の異常さをめぐって、早稲田大学で、討論会が行われたが、その参加者は2百人ていどであったという。どんな内容であったのか、日本の新聞は詳細を伝えなかったが、およそ笑いとは縁が遠かったであろう。数の多少はさておき、日本では、「異常さ」を笑いのなかに置き、批判し合うことのできる風土は残念ながらありそうもない。

第5共和国までの諷刺のことばは当局からは「流言蜚語」とされ、一方では「流蜚通信」に強い関心が注がれた。そのことばは時には「反共法」に抵触し、実刑の対象となるものであったから、きわどい線を出つ入りつした。そして、第5共和国の最後の年（1987年6月29日）にまがりなりにも、時の与党代表委員盧泰愚氏により「民主化」への約束が宣言された。上記の模擬国会はその1年余りのちのものであるから、ある意味では、諷刺にとってひじょうによい季節であった。

模擬国会のことばは現代日本の新聞のスポーツ欄にみられるような商品化された「だじゃれ」では決してない。真剣勝負のフィクションとでもいおうか。模擬国会のことばの背景には、その直前に行われた「国政監査」のやりとりがあった。そこでは、積年の悪弊を洗おうとして、野党の国会議員が原色的な言語で、政府を問いただしたが、テレビを通して映し出されたのは、空しい罵詈雑言の羅列、あるいは証拠不足で言い逃れを許す「後味の悪さ」でしかなかった。

国政監査は現職の国会議員が国民の声を代弁すべき場であり、一種のクツともいえた。連日、延々、10時間以上も実況中継されたのであるが、この異常な長さもクツとしてみれば理解ができる。ある野党議員は、朴正熙時代の言論弾圧の具体相を生き生きと再現したし、ある議員は80年5月の光州を再現した。その手法はクツの場における巫堂（巫覡）の託宣に似ている。しかし、『ハンギョレ』がこう指摘していたのは注目される。すなわち、本来、巫堂はあの世の神霊とこの世の人びとのあいだを取り持つために全力をつくし、ときにはクツののちに失神さえするが、現在の国政監査というクツをする議員たちがそれだけの努力をしていると「信ずる国民はあまりいない」と<sup>7)</sup>。

こうした政治不信のさなかにおいて、模擬国会は開催された。それはいうならば、真性のクツであった。

## 7. 価値の淵源

### 1

わたしは、現代韓国の友人知己の日常生活、あるいは政治、経済、社会、文化の動態、行動様式を自分なりに観察してきたつもりである。その上で、改めて感じることなのだが、およそ価値観と触れ合う部分においては巫俗つまり「クッパン（クッの場）」の世界に由来するものが多く、これを除けてしまっただけではどのような観点も寸足らずの説明にしかならないであろうとおもわれる。

クッとは手短かにいえば、「巫堂が歌や踊りをしながら鬼神にまごころを捧げる儀式」であり、また「演劇や大勢の人が集まり騒ぐ、一見に値する見世物」ということである<sup>8)</sup>。それはムラ、イエ、個人のあらゆる領域と密接にかかわり、言語表現の淵源に位する。現代人は必ずしも「クッをする」とはいわないが、潜在的にはそれを感じていることが多い。そして楽しいときに「シンが出る」「シンの風（신바람）が吹く<sup>9)</sup>」といい、また政治の世界などで憎さ余って、死なばもろとも、というときによく「水鬼ムルグワイ神シンチャクチョン作戦（물귀신작전<sup>10)</sup>）」という妙手に訴えるが、このいささかユーモラスな表現もまたクッの世界の神霊観に由来していよう。

宗教においては、名目上、キリスト教徒が1,100万余りとされるが、仏教、儒教、その他民俗的な宗教をいつく者も決して少なくない。それはまさに「宗教の百貨店<sup>11)</sup>」といった様相である。本来なら宗派間の激烈な闘争が起こってもよさそうであるが、なんとかこれを共存させている知恵の根源、それは巫俗ではあるまいか<sup>12)</sup>。クッの場こそは積尊も玉皇上帝も、山神もまとめていつく世界なのである。

また教会においても寺においても、女性信徒の祈願のなかから、家族、わけても夫の仕事の成功、子女の教育、立身出世、イエの安泰などの項目を取り除けば残るものはわずかであろう。こうした祈願は根柢においてクッの場にさかのぼる。

韓国人の勤労意欲の高さは今さらいうまでもなく称賛されているが、一



方で、その無定見な消費ぶり、いわゆる「過消費」は国の内外で批判されている<sup>13)</sup>。しかし、わたしには、この「過消費」はまず、当分のあいだはつづかざるをえないだろうとおもわれる。なぜなら、韓国の既成世代の多くの者が骨身を惜しまず働き、手に入れようとしたものは存外、単純なのである。その核心は一門、祖先に対して名を揚げることであり、できるならば壮大な墓所を作り、子女の結婚に莫大なカネを使いたいからなのである。そこでは絶えず、祖先とのかかわりでカネが使われるので<sup>14)</sup>、「浪費」の意識は少ない。むしろ、この面での消費を無理矢理、抑制すれば、それこそ価値観を根柢から動揺させることになるであろう。海外旅行先でやみくもに買い物をするなどとはそうした没価値の極みであろう。

虚勢としての過消費は論外であるが、冠婚葬祭とかかわる消費は、一面では、祖先供養なのである。そして、この、経済合理主義からみた「無駄」は、一方で韓国人の「生」を絶えず歴史のなかで育む機能を果たしている。韓国人は、日本人とは違って、高度経済成長を経験したにもかかわらず、「歴史」に対して今なおかなり謙虚であるが、それはイエ、祖先とのつながりにおいて具体的に捉えられた歴史感覚であるとわたしにはおもわれる。

それは多分にイエの歴史なのであり、社会全般の動態と必ずしも一致しないこともある。それはクッの変容ともかかわるのであろう。クッはかつてはムラ共同体とイエ、イエの成員をうまく包摂していたが、現今では、断片化している。地域共同体の不幸、災厄は今ではクッの対象ではない。それは「行政」という名の制度が扱うことになっている。しかし、行政が無能であるときはどう対応するのであろうか。成員のあいだでは、当然、クッが待望されるのである。

クッでは、巫歌が唱えられるが、巫歌の核心には「貴種流離譚」が語られる。無辜の女性が苦難の境涯に陥るが、隠忍ののちに、救済される。これは男の主人公にもいえる。それはかたちを変えていわゆる「弥勒」信仰のなかにもみいだされる。あるいは、仮面戯の始発の伝承にも伺える。簡単にいうと、現世での救済の観念である。

クッの場で培われた観念の現代的再生をわたしは、二つの事例においてみることができるとおもう。ひとつは全羅道における金大中待望論であり、もう一つは、詩人金芝河の時代状況との乖離現象である。どちらも現実の政治、社会的な事件と密接な関連のあるすぐれて微妙な問題である。しかし、これらは単なる現実政治や運動団体内部の一時的な現象とはみなせないものである。それはむしろ文化的な現象でもあるとわたしは考える。前者は「全羅道のこころの痛みの救済者」とされた者、いいかえると現代のミロクへの期待だとしかいいようがない。他地域からの、「科学的」な批判があればあるほど、全羅道の民衆におけるその像は堅固になり、現実政治の上にかぶさっていく。そして、遺憾なことに行政の不手際がこれを加速化させている。わたしはかつて、光州生活をしていたとき、大学裏のうらぶれた飲食店の主人の口から「キム・デジュン先生」を崇敬する熱い思いをきいたし、またその写真を恭しく掲げてある光景を目の当りにした。それは民衆のあいだの「赤心」であることはまちがいない。

今日、韓国人のあいだで弥勒(미륵)ということばが云々される機会は非常に少ない。しかし、この観念は民衆思想の根柢を絶えず流れてきた一筋の豊かな水脈であることは確かである<sup>15)</sup>。新羅人の理想を盛り込んだ貴族集団「花郎徒」は弥勒の下生信仰を背景にしたものであり<sup>16)</sup>、また高麗末に末法思想が弥勒下生の観念と結び付いたとき、弥勒を自称する弓裔(?-918)のような人物が現れ「民乱」を引き起こした。このパタンは以後もくり返された。高麗末に現れた辛旽はやはり詐術を使いつつ弥勒を自認した<sup>18)</sup>。また朝鮮朝においても、弥勒信仰を根柢に持った事件が起きているが、なかでも1688年、ソウルに近接した揚州郡で僧侶呂還を中心に弥勒の徒の一団が生じ、7月の洪水を期に宮城に侵入し、天下を治めようとした事件などは顕著なものである<sup>19)</sup>。

弥勒信仰は変容しつつ、19世紀末の東学や甌山教などの新興宗教において継承された。それらの教義の根底にある「後天開闢」とは、今日以降の

世（後天）において新生が期待されるというもので、まさに弥勒の下生ということの焼き直しだという<sup>20</sup>。

ところで、この弥勒信仰にはどうも龍信仰が絡みついている。それはミルク（弥勒）という漢字語の発音がそもそも龍を意味する古語ミルに通じるからであり、また実際、前記の呂還の事件においては呂還の妻元香が「龍夫人」として活躍している。しかもこの夫婦の背後には巫女戒化がいて、これが村人を動員するのに一役買っている<sup>21</sup>。

弥勒思想は明らかに巫俗信仰のなかに取り込まれている。そこで、一旦はこういうことができるだろう。すなわち、巫俗には現世救済あるいは後天開闢の思想はなかったが、たまたまミルクとミルとの音の類似から、東洋的な救済信仰が入りこんだのだと。

ところが、そうとばかりもいきれない。朝鮮の民間では、乱世になると、「真人」が南の海からやってくるという説話が広まるのが指摘されている<sup>22</sup>。真人がより民俗化すると、たとえば、黄海道鳳山の仮面戯の中興者としてあげられる安草木のような者に至るであろう。すなわちこの人物は全羅南道のある島に流され、戻ってきたのち、従来の面に改変を加え、こののち仲間の下級官吏が仮面のあそびをやるようになったという<sup>23</sup>。一方、この地方では、仮面は厄除け用に戸口に掛けられたし、また仮面のあそびが病災を防ぎ、豊作を呼びいれるものとして受けとめられていた<sup>24</sup>。

こうした脈絡を考慮すると、ミルク（弥勒）はミル（龍）に音が似ているからというだけでなく、もともと「真人」の到来を期待する民俗信仰が基盤にあって迎え入れられたということになろう。そして、この真人なる者もさらにいえば、危機に瀕した共同体を救いに訪れるカミの別称、いいかえると、より人間化した者のことだったとおもわれる。朝鮮ではこうした者が真人の外にも知られていて、趙東一氏は説話を通して、これを「神人」「英雄」「異人」に分類し、性格付けをしてみた<sup>25</sup>。ここでは、その詳細を述べる必要はないだろうが、これらのカミ、ヒトを受け入れる民衆の心意はどこで生まれたのであろうか。わたしには、それは巫俗、わけても別神クッあるいは儺（鬼やらい）のようなクッに淵源するとおもわれる<sup>26</sup>。

クッの場には困窮、危機からの救済の民衆的な願いが充満している。しかも、それはかなり徹底して此岸的である。天王も世尊も、山神も龍神もすべて、この世の生をまっとうするために呼ばれる。そして、まっとうできなかつた生に対しては、これを演戯化して笑いとともにもてなしてやる。とはいえ、クッの場からは、現実の生をより快適にすごせるような積極的な方法論は生まれぬ。それは矛盾や葛藤をなくならせる手段ではない。むしろ矛盾や葛藤を前提にし、しかも決して諦念に陥らない、しぶとさの思想である。

こうした、生命観を詩人の直観で体得している金芝河のような人は、「民衆」を云々しつつ死に急ぐ若者に我慢ができなかつたのだろう。かれは1991年5月、『朝鮮日報』において、大学生の一連の抗議自殺をなじり、「死のクッパンをたたため」と説いた。すなわち、民衆に学ぼうといいながら、いったいほんとうに学んだのか、という。「生の行進ではなく、死の行進」をしようとしているが、それは朝鮮民衆のクッではなく、身の毛もよだつ似而非クッであるともいう<sup>27)</sup>。

それは、クッ本来の在り方からみて、しごく当然なことばである。ぎりぎりまで耐え忍んで、手足が萎えるほどの苦悶ののちに朽ちていったのが、クッの場の不格好な登場人物なのである。それを、若い盛りの者がいとも短気に自殺するなどということはあってはならないことだという。おそらく巫堂に、もし、社会的な発言の場が与えられれば、同じことをいったであろう。

しかし、運動圏の学生からはこれは「背信」として指弾された。戦わなくなった「抵抗詩人」の後ろ向きなことばにすぎないというわけである<sup>28)</sup>。はたして、土俗にこだわる詩人が小さくて、社会科学に明るい詩人が偉大なる名を残すのかどうかは、文学論の帰趨つまり文学史にかかわることであり、それはわたしの関心の埒外にある。ただ、公的な場でのこうした論争にばかり目がいくと、詩人でもなく、運動のリーダーでもない人びとの

価値観の淵源をあまりにも無造作に扱うことになりはしないかと危ぶむ。クッの世界はそう脆弱なものではない。民族の歌曲「鳳仙花」の歌詞にこめられた、身柄は亡くなろうと魂は蘇らんという、あの思いに通じるものがクッへの期待なのだとおもわれる。

弥勒や真人はいうまでもなく、およそクッなるものは現在の多くの韓国人には必要がなくなっているようにみえるが、それはことばが一旦、日常から消えたというだけのことで、心意の世界から跡形もなくなったということでは決してないとわたしは考えている。

## 注

- 1) われわれ日本人がいかに倫理に無関心かということは、たとえば1985年12月、政治倫理審査会なるものが衆参両院に設置されたのだが、この審査会が、1992年5月現在、会長人事などを除くと、1度も開かれていないということからもよくわかる（1992年5月18日付け『毎日新聞』）。
- 2) 1988年3月4日付け、『東亜日報』。
- 3) 1992年3月15日付け、『東亜日報』。
- 4) 『朝鮮』、1937年2月号所収。『朝鮮芸能史』、李杜鉉、1990年の巻末に再録。
- 5) 「河回 別神仮面舞劇 臺詞」、柳漢尚、『国語国文学』20号、1959年（ソウル）所収。
- 6) 以下は1988年10月30日付け『ハンギョレ新聞』を中心とし、部分的に10月28日付け『東亜日報』で補った。本文中のカッコ内の注は筆者による。
- 7) 1988年10月21日付け、『ハンギョレ新聞』。
- 8) 『国語大辞典』、李熙昇、435頁、1982年版。
- 9) シンは神（シン）だということについては、「日常語からみた朝鮮文化一叙説」、拙稿、『藝文研究』第60号、1992年、437頁参照。
- 10) たとえば、アメリカ議会の民主党議員たちは、不良手形発行スキャンダルで非難されていることへの対応策としてホワイトハウス、行政府の運営費を洗いなおすことにしたというニュースがあるが、これは韓国人の視角からみると「米国民党 水鬼神作戦」ということになる（1992年4月10日付け、『東亜日報』）。
- 11) 『韓国人の診断』、東亜日報編、1991年、213頁。ちなみに、同書によると、1985年のギャラップ調査の結果、韓国の宗教人口は、仏教20.9%、改心教

19.2%、天主教(カトリック)7.0%となっている。全人口を4,200万として計算すれば、仏教が約880万、キリスト教全体が約1,100万となる(123頁参照)。ところが、各宗教団体の提出した人口数を合算すると、これがなんと、4,900万人ほどになるという。

- 12) とはいえ、韓国における宗教間の葛藤が「危険水位」をはるかに越えたということも指摘されている。聖物の冒瀆、毀損が絶えず、また仏像に赤いペンキで十字架を画いたり、仏像の一部を切断したりするなどということも枚挙に暇がないという(前引書213-214頁)。こうした排他性はクッの場には決してないのだが、日本のばあいと違って、韓国社会とくに都市においては、根柢から民俗宗教的なものが払拭されつつあることもまた事実であり、従って、宗派間の争いが一層、顕在化する可能性がある。
- 13) 前引『韓国人の診断』のうち、「金遣いがあらい」をはじめ、「慶弔事をあまりに重視する」「婚需にカネを使いすぎる」などの項目参照。
- 14) 祖先が意識された場において、庶民はいかに気前がよいかは東海岸の「別神クッ」やソウルの「財数(財福)クッ」の場における1万ウォン札の数をみれば明らかである。また、墓に対する執着の強さは次の『東亜日報』の記事がよく物語っている。すなわち、保健社会部(省)の発表によると、国会議員や企業の会長、ロータリークラブ総裁などは池や駐車場まで備えた豪華墓地を不法なやり方で作ったという(1992年5月26日付け)。これに関しては、さらに翌27日付け、一面の常設コラムにも記事があって、朝鮮朝の名臣李植は決して豪華な墓を作らぬように遺言し、代々守られた、これは特筆に値することで、世の成金どもは見習うべしという。この背景には、毎年15万基、10平方キロの墓が新たに作られている韓国の現実がある。
- 15) 朝鮮民衆思想史における弥勒思想の流れは『韓国弥勒信仰の研究』、金三龍、1983年(ソウル)、『朝鮮後期社会変動研究』、鄭奭鍾、1983年(ソウル)、『弥勒思想と民衆思想』、金芝河他、1988年(ソウル)などに詳しい。なおまた、以下の歴史的な記述とも重なるところがあるが、1989年7月22日付け『東亜日報』によると、「8月8日に末世がくる」という教義を立てた弥勒信仰の集団が主婦の家出を誘い、物議をかもした。かれら男子17名、女子57名は「新たな王国で新たな生を始める」といい、全羅北道淳昌郡の回文山の溪谷にこもり、ひたすら祈禱に明け暮れた。ちなみにそこに参加した婦人たちは、夫が公務員、教育者、国立大学事務職幹部などという人も多いという。そして、この集団のリーダー全末任は、自分たちは弥勒仏を敬っているといっている。この集団についてはそののちなんの報道もないので、おそらくごくありていの新興宗教として活動したということなのだろう。
- 16) 金三龍、前引書、79頁参照。
- 17) 同上、65頁。

- 18) 同上, 66頁。
- 19) これはあいにく予期した雨が降らず, また蜂起計画が漏れて未遂に終わった。鄭奭鍾, 前引書, 45頁参照。
- 20) 金三龍, 前引書, 212, 213頁。
- 21) ミルクとミルの類似のことは, 前引金三龍, 219頁参照。また「龍女夫人」のことは, 鄭奭鍾, 前引書, 45頁参照。
- 22) 真人思想が歴史的にくり返し登場する一つの類型であるということについては、『韓国説話と民衆意識』, 趙東一, 1985年, 101頁参照。また「韓国説話に現れた弥勒思想」, 宋基淑, 165頁参照(前引『弥勒思想と民衆思想』所収)。
- 23) 『韓国の仮面劇』, 李杜鉉, 1979年(ソウル), 182頁。
- 24) 同上, 186頁。
- 25) 前引趙東一, 87頁, また前引宋基淑, 140-141頁参照。
- 26) 儼, とくに民間の儼戯の諸問題は「跳花」, 拙稿, 『慶応義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』(1992年)参照のこと。
- 27) 1991年5月5日付け『朝鮮日報』。この当時, 機動隊による大学生姜慶大君の撲殺に始まり, 学生の抗議行動が高揚していたが, 4月の終わりから連続4名もの学生が焼身自殺という異様な行動に出た。そうしたなかでの詩人の発言であったが, 政治の次元だけで取り上げれば, この発言は, 機動隊の権力乱用への学生の抗議に対して, 意図的に冷水を浴びせるものと取られたのである。
- 28) 文芸評論家であり, 民主化運動の担い手でもある任軒永の金芝河に対する次の発言は, こうした類いの告別の辞の手短な例であろう。すなわち, 金芝河は80年代以降, 中世的なシャーマニズムのなかに韓国の未来の針路を求めようとし, そのことによって社会科学と断絶し, 若者に背を向けられるようになった, かれはいまなお民俗的, 土俗的な信仰のなかで社会と歴史を見ているのであり, それは偉大な民族詩人への道ではないという(『世界』1992年, 4月号)。